平成二十七年度

広島学院中学校入学試験問題

国語　【六十分】

◎試験開始まで、問題用紙にも解答用紙にも手をふれてはいけません。
次の注意を読みなさい。

注意

一、問題用紙
この問題用紙は、2ページから15ページまでで、問題は二問あります。
二、解答用紙
解答用紙は別の用紙1枚です。
三、記入・質問などの注意
(一) 答えはすべて解答用紙のわくの中に、ていねいな字で記入しなさい。
(二) 印刷が悪くて字のはっきりしないところなどがあれば、手をあげて監督(かんとく)の先生に知らせなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「目的」と「目標」はどう違うのだろうか。どちらも、何か目指しているものを表している点では同じだ。しかし、たとえば「学校に行く目的」とは言っても、「学校に行く目標」とは言いにくい。「努力目標」とは言っても、「努力目的」と言うと、少し違和感がある。①どうやら、目指しているものに微妙な違いがあるようだ。

もうずいぶん前から、「数値目標」という言葉が、世の中でよく使われるようになった。「今月の売り上げ目標は三百万円」とか、「今度の試験では三十位以内が目標」というように、1ジッサイの数字をあげて目標を立てる。一方、「数値目的」という言葉が使われることはない。目標は数値で表せるが、目的は数値では表せない。「来月は千個販売する」とか、「試験で八十点取る」などはすべて目標であって、目的ではない。

「生きる目的は何か」と問われたら、どう答えるだろうか。「2イチオク円稼ぐこと」とか、「野球の選手になって、二〇〇本安打を打つこと」などとは、答えにくくないか。「大金持ちになる」とか「プロ野球選手になる」と答える人は多いが、それでも「生きる目的」の答えとしては、②ちょっと物足りないように思う。人間が生きていく上で、その目的は何かを考えるのは、なかなか難しい。「みんなが幸せになること」・「世界の平和に貢献すること」・「人に喜んでもらうこと」など、人それぞれ答えは違うだろう。ともあれ、少なくとも、数字で表せることは、「生きる目的」の答えとしては、どこか変だと感じる。数値で表すことができて、より身近で、より個別的なのが「目標」で、遠くにあって、数字では表しにくくて、もっと一般的なのが「目的」なのである。

③「数値目標」という言葉が、よく使われるようになったのには理由がある。「目標」というものは、目に見える形で設定する方が達成できたかどうかを判断しやすいし、目に見える目標であれば、それに向かって努力しやすいからだ。「売り上げ

を伸ばす」という漠然とした目標よりも、「来月は売り上げを二百万円にする」という目標にした方が、日々、何をどうすればいいかを考えやすいし、目標が達成できたかどうかも判断しやすい。私たちは、最終的に目指している「目的」はさておいて、身近でわかりやすい「目標」を立てていく方が、努力を続けやすいのだ。

したがって、「目的」を最終到達地点とすれば、「目標」は、そこに向かう過程であると言うこともできる。だから、「目的」はあきらめてしまうことはできなくても、「目標」は、場合によってあきらめても構わない。到達できなかった「目標」は、そこであきらめて、あらためて別の目標を立て直せば良い。目標は、目的のためにあるのだ。

現在もアメリカの大リーグで活躍しているイチロー選手は、日本のプロ野球選手だった時から、数々の大記録を残してきた天才バッターだ。大記録ゆえに天才バッターと言われるが、もちろん、その才能だけで、何の努力もしないで、大記録を残したわけではない。誰にもまねできない、それこそ天才的な努力を、ずっと続けている人だ。イチロー選手は「④しっかりと準備もしていないのに、目標を語る資格はない」と言っている。また、ある時インタビューに答えて、次のようにも言っていた。「プロ入りした時、二〇〇〇本安打打てるようになれよとスカウトの方に声をかけてもらったことを思い出しますが、今日のことは、日付が変わるまでには終わりたいと思います。次の目標は、次のヒットです。」と。イチロー選手は、二〇〇〇本安打どころか、すでに四〇〇〇本安打を達成した大打者だが、毎日「次のヒット」を目標に、そのために今何をすれば良いかを考え、努力を続けてきたのだ。もちろんヒットの出なかった試合もたくさんあるが、そういう日々の目標と、それを達成するための努力の3ケッカとして、二〇〇〇本安打も四〇〇〇本安打も達成したのである。イチロー選手にとって「目標」とは、日々の努力の4ゲンドウ力であるように思う。

イチロー選手は四〇〇〇本安打を達成した時に、「四〇〇〇を打つには三九九九本が必要なわけで、僕にとっては四〇〇〇本目のヒットも、それ以外のヒットも同じように大切なものであると言えます。」と言っていた。イチロー選手は、また『目

標』って高くし過ぎると絶対にダメなんですよね。必死に頑張っても、その目標に届かなければどうなりますか？　あきらめたり……、挫折感を味わうでしょう。それは、目標の設定ミスなんです。頑張れば何とか手が届くところに目標を設定すれば、ずっとあきらめないでいられる。そういう設定の仕方が一番大事だと僕は思います。」と言ったこともある。一つ一つの大記録は、見ている私たちには立派な［　A　］だが、イチロー選手にとっては一つの［　B　］でしかない。イチロー選手は、すぐに新たな目標を設定して、そこに向かってコツコツと努力を続けていく。そういう生き方が大切なのだと語っている。

では、イチロー選手にとっての「目的」とは何だろうか。イチロー選手自身が、自分の目的についてはっきり語ったのを聞いたことはない。アメリカの大リーグで活躍することは、多くのプロ野球選手にとって夢であるはずだ。イチロー選手にとってもそうだったかもしれない。しかし、今のイチロー選手を見ていると、⑤それも一つの目標に過ぎなかったようにも思える。イチロー選手の、野球選手としての目的は何だろう。そして、一人の人間としての目的は、何なのだろうか。誰にとっても、⑥それを語ることは難しい。被災地を訪れたタレントや、その日の試合でヒーローになったスポーツ選手が、インタビューに答えて、「〇〇を通して、多くの方に元気を届けたい」といったコメントをすることがある。その人たちは、自分のしているタレント活動やスポーツの「目的」を、その時、それとなく語ってくれているような気がする。人は誰も、自分以外の誰かの役に立ちたくて、誰かを喜ばせたくて生きているのだ。イチロー選手の目的も⑦そこにあるかもしれない。

イチロー選手は、「夢は近づくと目標に変わる」と言っていた。「夢」とは、まさしく目指している「目的」なのではないか。しかし、その「夢」さえも近づけば「目標」に変わる。イチロー選手はきっと、次の、もっと遠い「夢」を持つのだろう。そうやって夢をも、どんどんふくらませ続けているように思う。

⑧私たちは、「目的」と「目標」をしばしばはき違えてしまう。入学試験に合格して、勉強する気をすっかり失ってしまうとしたら、それは目的と目標をはき違えていると言わざるを得ない。入学試験は決して目的ではない。その学校に入学したいと思うのは、その学校で勉強するためであるはずで、せっかく合格しても、勉強する気を失ったのでは意味がないではないか。5モえ尽き症候群という言葉はそんな状態を表している。

「目的」と「目標」、私たちはいつもその両方を意識していたいものだと思う。「幸せになること」・「平和な世界」・「自由で人間らしい人生」・「人に喜んでもらうこと」などなど、人によって表現は違っても、私たちは自分が生きる「目的」をいつも見つめていたいものだ。そして、その「目的」に向かって、日々、小さな「目標」を立てながら、不断の努力を続ける人でありたいと思う。「夢」を追い続けるイチロー選手のように。

※　問いで、字数制限のあるものについては、すべて　、や　。や「　」も字数にふくみます。

問一　――線部①「どうやら、目指しているものに微妙な違いがあるようだ」とありますが、次の1～5は、文章中で述べられている「目的」と「目標」が目指しているものの違いを整理した文です。1～5それぞれの（　　）に入ることばを、文章中からぬき出して答えなさい。ただし、1の（　　）には同じことばが入ります。

1　目的が目指しているものは（　　）で表すことは難しいが、目標が目指しているものは（　　）で表せる。

2　目的が目指しているものは遠くにあるもので、目標が目指しているものは（　　）なものである。

3　目的が目指しているものは（　　）なもので、目標が目指しているものは個別的なものである。

4　目的は最終到達地点で、あきらめてはならないが、目標はその（　　）で、あきらめることがあっても構わない。

5　（　ア　）は（　イ　）のためにある。

問二　――線部②「ちょっと物足りないように思う」とありますが、どういう点が「物足りない」のですか。自分のことばで十五字以内で答えなさい。

問三　――線部③『数値目標』という言葉が、よく使われるようになったのには理由がある」とありますが、その「理由」を二つ、それぞれ十五字以内で答えなさい。

問四　――線部④「しっかりと準備もしていないのに、目標を語る資格はない」ということばは、イチロー選手の「目標」に対するどのような考えにもとづくものですか。イチロー選手のことばを使って、三十字以内で答えなさい。

問五　[A]・[B]に入る漢字三字のことばを、それぞれ答えなさい。ただし、どちらも「～点」ということばです。

問六　――線部⑤「それ」・⑥「それ」・⑦「そこ」の指し示す内容を、それぞれ答えなさい。

問七　――線部⑧「私たちは、『目的』と『目標』をしばしばはき違えてしまう」とありますが、「目的と目標をはき違える」とはどういうことですか。説明しなさい。

問八　この文章の内容に合っているものを、次のア～カから二つ選んで、記号で答えなさい。

ア　私たちは、小さな目標を設定することが大切で、大きな目的を持つ必要はない。
イ　私たちは、大きな目的を持つことができないので、せめて小さな目標をたくさん持つ必要がある。
ウ　私たちは、大きな目的を持つと同時に、小さな目標を設定して日々努力することが大切だ。
エ　私たちは、大きな目的を達成するためには、小さな目標は持たない方がよい。
オ　私たちは、小さな目標を持つことによってだけ、大きな目的があることに気付くことができる。
カ　私たちは、いつも大きな目的意識を持っていたいものだ。

問九　――線部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。（一点一画をていねいに書きなさい。）

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

交通事故で両親を同時に亡くした太輔は、親と一緒に暮らせない子どもたちの児童養護施設「青葉おひさまの家」で生活しています。文章中に登場する「みこちゃん」はこの養護施設で太輔たちの世話をしてくれる大人の女性です。

「中止だけは、あかん、絶対」

太輔よりも先に、淳也が大股で歩きだした。「おい」呼び止めてみても、その速度は緩まらない。そのまま大部屋を出て右に曲がる。事務室がある方向だ。

「兄ちゃんっ」麻利と同時に、太輔も大部屋を出ていく。できればここにいたい、怒られたくない。作戦中止はいやだ、美保子に申し訳ない、いろんな思いが代わる代わる現れて、そのたびに歩く速度が変わった。

淳也は、［　　］、前へ前へと進んでいく。その後ろ姿が、太輔には、①淳也のそれではないように見えた。

淳也は、子どもたちだけで花火をすることを怖がる。大人に怒られたくないからだ。みんなで隠れてお菓子を食べるときも、一番、大人に見つかることを怖がる。太輔は今までずっと、そんな淳也の姿を見てきた。

今、淳也は、本当にアリサ作戦だけのために動いているのだろうか。太輔はふと、そんなことを思った。

事務室に入る。みこちゃんはいない。そして、事務室の奥にあるドアが閉まっている。「どうしたの？」声をかけてくる職員を無視して、太輔たちはそのドアの前まで進んだ。

奥の部屋のドアが閉まっているときは、お客さんが来ている証拠だ。一番前を歩く淳也が、ノックをすることもなくそのドアを開けた。

「でもこの子たちが学校を荒らすなんて、そんなこと、私には信じられません」

その途端、みこちゃんの声がこちらに向かって流れてきた。まっすぐに伸びた美保子の背筋が、狭い部屋の中で目立っている。

「……どうしたの、あんたたち」

みこちゃんが驚いたようすで立ち上がる。美保子が眉間にしわを寄せたのがわかった。ミホがなんとかするのに、という1ヒトリ言が、太輔には聞こえた気がした。

先生がこちらを見ている。先生は何も言わない。

「君が連れてきてくれたのか」

先生が麻利を見た。サッと、麻利が淳也の後ろに隠れる。

「先生」

太輔は、ぐっと両足を踏みしめた。

「……学校が荒らされた話で、ここに来たんですよね」

勇気を振り絞ってそう言ってみたものの、太輔は顔を上げることができない。

「②証拠もないのに、おれたちが犯人だって決めつけるのはひどいと思います」

怒っている大人は、そこにいるだけで怖い。

「美保子と……君だったかな」先生は麻利に視線を走らせる。「六年生を送る会の話し合いで、ランタンを飛ばしたいって言ってただろう」

あの委員会に立ち会っていたのは美保子の担任の、この先生だった。

「そしたら、あの背の高い女の子と言い合いになって……君は言ったよね、自分でみんなの分のランタンを作るって」

こくん、と、淳也の後ろで麻利が頷く。

「竹ひご、針金、トレーシングペーパー。盗まれたものは、全部ランタンの材料だ」

③はあ、と、先生は息を吐いた。

「こんなの、ランタンを触ったことのあるこの町の人間なら誰だってすぐわかる。先生たちだって小さいころは、毎年飛ばすの楽しみにしてたんだからな」

一瞬だけ緩んだように見えた表情を、先生はまた引き締めた。

「美保子」

「はい」
美保子はきちんと返事をする。
「妻が、店に君が来たと言っていた」
あ、と、思わず少し開けてしまった口を、太輔は慌てて閉じる。
「嘘の宿題の話をされたり、ロウソクが欲しいってねだられたり、いつのまにかオイルがなくなっていたり……」
先生の声が低くなる。
「先生は、人のもの、学校のものを盗んでやろうとしていることを見逃すわけにはいかない」
部屋の中がしんと静かになった。
静かな部屋のなかでは、罪のようなものがぼんやりと炙り出されてしまう。何か言わなければ、アリサ作戦はこのまま終わる。太輔は直感的にそう思った。
「あの」
「ごめんなさい」
突然、淳也が頭を下げた。
「ものを勝手に盗んでしまって、本当にごめんなさい」

淳也の鼻の頭は、自分の膝にくっつきそうになっている。「ほら、みんなも」淳也に促され、太輔も頭を下げる。麻利も、美保子も、それに倣った。
しばらくして顔を上げる。淳也だけはまだ、頭を下げ続けている。
「でも、あかんのや、ここで止められたら」
淳也の小さなつむじが、後頭部の髪の毛に隠されている。
「ここであかんくなったら、全部台無しになってまう。自分たちだけで全部やらな、意味ないんや。太輔くんが考えてくれたこと、佐緒里姉ちゃんのこと、それに……」
続けて言おうとしたことを吹き飛ばすように、淳也はパッと顔を上げた。
「とにかく、あかんのや、ここでダメになったら」
そう言い捨てて立ち上がった淳也は、そのまま部屋から出て行ってしまった。ア「淳也！」名前を呼んでみても、ぱたぱたぱた、と足音は離れていく。
淳也の様子に面食らった先生が、こほん、とひとつ咳ばらいをした。「すみません、なんだかこんな……」みこ

ちゃんが申し訳なさそうにそう言ったとき、ぱたぱたぱた、と、今度は足音が近づいてきた。
「ほら！」
部屋のドアが開く。
「もう、こんなに作っとる。みんなで、ほとんど寝ずに、毎日」
足でドアを開けた淳也は、両手いっぱいに真っ白いランタンを抱えていた。かさ、と頼りない音を立てて、溢れてしまったひとつが足元に落ちる。
大人に見つからないようにする。そのたったひとつの約束のもと、材料が揃ったその夜から、みんなで集まってランタンを作った。佐緒里が眠ったあと、麻利や美保子はできるだけ音をたてないように太輔と淳也の小部屋に移動してきた。二段ベッドの下で四人、ぎゅうぎゅうづめになりながら、はさみを動かし水のりで手を汚した。
「なあ、先生、お願いや」
淳也は部屋の入り口から動かない。
「終わったら全部返す。針金も、竹ひごも、全部。全部ぼくが買ってくる。おこづかい集めるし、貯金箱も割る」
もうひとつ、淳也の腕からランタンが落ちる。
「だから、送る会でランタン飛ばさせてえや。ぼくたちだけで、最後までやらせてえや。そうじゃないとあかんのや」
立ち上がったみこちゃんが、「わかったから、もう座って」と淳也の背中に手を添えている。淳也は、テーブルの上でパッと腕を広げる。白いランタンが、さあとひろがった。
わかったから、って、一体何がわかったのだろう。きっと、誰にもわからない。
イ「ごめんなさい、だからお願いします、ごめんなさい……」
だって、太輔にだって、わからないのだ。
淳也は本当に、佐緒里のためだけにランタンを飛ばすのだろうか。
「座りなさい」
先生は立ち上がると、淳也の肩に手を置いた。そのまま、淳也を椅子に座らせる。太輔たちもみな、並んで座った。

「先生が願いとばしを認められない理由はふたつある」
席に戻った先生は、まるで授業をするように言った。
「ひとつは、さっきも言ったように、ランタンが盗まれたものでできていること。いまは2ハンセイしているかもしれないけれど、人のもの、学校のものを盗むのはいけないことだってわかるよな」
ぬすむ、という音はそれだけで不気味な響きをしていて、そんな言葉がいま自分自身に3フりかかっていることが太輔には信じられなかった。
「もうひとつは、願いとばしはいろんな人たちの協力がないとできないってことだ」
④かつん、と小さな音がした。
「火を点けたものを空に飛ばす。君たちは知らないと思うけど、それは勝手にやっていいことじゃないんだ。いろんなところの許可を取らなければいけない。先生もこんなこと、したことがない。火を使うようなことを学校行事で行うのは、すごくすごく難しいんだ」
かつん。

「そういうことも、君たちだけでできるのか？」
かつん、かつん。
みこちゃんの爪の先が、テーブルに当たっている。
「まず必要なのは、消防署の許可です」
じっとこちらを見つめていた先生の顔が、パッと横を向いた。
「ランタン飛ばしはもともとこの町の4デントウだったので、許可はすぐに下りると思います。加えて、当日はもしものときのために消防車に5タイキしてもらわなければなりませんが、ここと消防組合とはもともとつながりがありますから、私が頼めばおそらく何とかなります」
「何言ってるんですか、ウあなた」
先生が、ぺらぺらと話し出したみこちゃんを睨む。
「あと必要なのは、必ず大人が火を点けるようにすることでしょうか。こちらは、先生たちからの案内でどうにかなります。チャッカマンをいくつか用意してもらえれば、それで大丈夫です。もちろん、落ちたランタンの回収は、この子たちだけでも必ずやらせます」

掃除も含めて学校行事にしたらいいのかもしれませんけど、と、みこちゃんも先生のほうを向く。
「みこちゃんすごおい。学校の先生より説明じょうず」
麻利の無邪気な声に、⑤先生の太い眉がぴくりと動く。
「あんたたちが蛍祭り復活の署名で盛り上がってたときがあったでしょ。そんとき、ここでちょっとでも蛍祭りみたいなことができないかなって思って、いろいろ調べてみたことがあんの」
そんだけ、と切り捨てると、みこちゃんはしゃんと背筋を伸ばした。
「ものを盗んだことは、私からもきつく叱っておきます。だけどこの子たちは、それが悪いことだって、じゅうぶんわかっているはずなんです」
先生の硬い表情は変わらない。
「誰かから何かを奪ってはいけないなんて、そんなこと、この子たちはわかっています。きっと、ェ私たちよりも」
みこちゃんは、顔だけでなく、体も先生のほうに向けた。
「だからもし、ふたつめの理由が原因で先生がためらっていらっしゃるなら、⑥どうか、この子たちに協力してあげてほしいんです」
だって、とみこちゃんは太輔たちのことを見る。
「あんたたち、寝ないでそんなもの作れるような根性なんてないじゃん。みんないっつも食べるだけ食べて朝は寝坊ばっかりしてさ。片付けとかも全然しないし、洗濯物だってこの班だけいっつも溜まってるし、靴だっていつも脱いだままでぐちゃぐちゃだし」
ここに来てから毎日太輔たちのことを見てくれている目が、いまもそこにある。
「だから私にはわかんない。何のためにここまでするの？」
佐緒里のためだ。
太輔は、みんなの顔を見る。
美保子は、麻利は、淳也は、一体、何のためだろうか。
⑦「それは……」
口ごもる淳也の前に、ランタンの白色がひろがっている。
（朝井リョウ『世界地図の下書き』による）

※ 問いで、字数制限のあるものについては、すべて 、や 。や「 」も字数にふくみます。

問一 [　　]に入ることばとしてもっともふさわしいものを、次のア～エから選んで、記号で答えなさい。

ア 春の日差しに包まれるようにして　　イ 夏の太陽をはね返すようにして

ウ 秋の風に吹(ふ)かれるようにして　　エ 冬の空気を裂(さ)くようにして

問二 ――線部①「淳也のそれではないように見えた」とはどういうことですか。説明しなさい。

問三 ――線部②「証拠もないのに、おれたちが犯人だって決めつけるのはひどいと思います」とありますが、太輔がその証拠を示されたと思ったのは、先生のどの発言ですか。初めの五字をぬき出して答えなさい。

問四 ――線部③「はあ、と、先生は息を吐いた」・⑤「先生の太い眉がぴくりと動く」は、先生のどのようなようすを表していますか。それぞれ次のア～カから選んで、記号で答えなさい。

ア ほっとしたようす　　イ ぞっとしたようす　　ウ むっとしたようす

エ おどろくようす　　オ あきれるようす　　カ 感心するようす

問五 「先生が、子どもたちの気持ちをわかっているようす」が現れている部分を、十五字以内でぬき出して答えなさい。

問六 ――線部ア・イはだれの発言ですか。また、――線部ウ・エはだれのことですか。それぞれ答えなさい。

問七 ――線部④「かつん、と小さな音がした」とありますが、だれの、どんな気持ちが表れていますか。次の（　1　）・（　2　）にことばを入れて答えなさい。ただし、2は十字以内で答えなさい。

（　1　）の、（　　2　　）気持ち。

問八 ――線部⑥「どうか、この子たちに協力してあげてほしいんです」とありますが、この時のみこちゃんの気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問九 ――線部⑦『それは……』／口ごもる淳也の前に、ランタンの白色がひろがっている」とありますが、淳也は何のためにランタン作りをやっていたのだと思いますか。

問十 ――線部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。（一点一画をていねいに書きなさい。）

平成二十七年度　国語　解答用紙

（※のらんには何も書かないこと。）

一

問一	問二	問三		問四		問五	問六		問七	問八	問九	
1		・	・			A	⑤	⑦				1 ジッサイ
2						B						
3												2 イチオク
4							⑥					3 ケッカ
5 ア												4 ゲンドウ
イ												5 モ
												え
※		※		※		※			※	※		※

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八			問九	問十	
		┐	③		ア	1						1 ヒト
			⑤									り
					イ							2 ハンセイ
						2						
					ウ							3 フ
												り
					エ							4 デントウ
												5 タイキ
※	※	※	※							※		※

受験番号

合計
※